半導体から航空・宇宙まで 専用機でものづくり支える

齊藤精機㈱
代表取締役社長 **齊藤 武さん**

齊藤精機（中央区淵野辺）は、太陽電池関係の各種専用機・装置をはじめ、半導体関係の各種専用機や光学ガラス関係の汎用（はんよう）機などの設計・製造、受託加工を手掛ける企業です。自動車や航空機、衛星関係といった今後の成長が見込まれる分野で、海外を含め業容の拡大も目指しています。その一方で、社内では報告業務や営業活動、製造現場などで、デジタル化にいち早く着手。DXを推進するとともに、セキュリティ対策を強化しています。今回は同社の齊藤武社長に、事業内容や展望などについて聞きました。

―齊藤社長は3代目でいらっしゃるそうですね。

「はい。戦時中の1939年に祖母が東京都大田区大森で創業し、父が2代目、私が3代目になります。父に聞いた話では、戦後間もなく、本田宗一郎さんの二輪車製造に関わる仕事を引き受けるようになり、部品製造用の機械製造を始め、軍需から民需にシフト。その後は四輪車向けの業務も受注するようになったそうです。また、60年代に差し掛かると、日本の製造業は『量産』か『単品の受託生産型』かの二つに分かれるようになりました。当社は受託型企業を選びました。それ以来、お客さまが何をしたいのか、どんなものが欲しいか、というスタンスを基本にしています」

―会社にとって転機になった出来事はありますか？

「大きな転機となったのは、70年代後半です。大手建機メーカーから『半導体製造関連の自動機を作れないか』という相談を受けたことです。そこで倉庫のような場所に機械を入れ、運用テストをしながら自動化装置を製作し納入したところ『誰でも使えるようになった』と好評でした。これが契機となり、80年代から半導体シリコンインゴット加工機の開発・製作を始めました。半導体の基板となるシリコンウエハーは、円柱状のシリコンを薄く輪切りにして作りますが、その前にシリコンインゴットという塊を棒状に削る必要があります。その工程を自動化したのが当社の加工機です」

―最近ではDX化を積極的に推進されているそうですね。

「社内で報告書作成をデジタル化したり、営業活動にデジタルツールを取り入れたりして業務の効率性を高めています。また、従業員全員に同じ機種のiPhoneとiPadを支給しています。一方、セキュリティの強化にも注力しています。例えば、顧客の図面データなどの秘密情報は、社外に持ち出せない仕組みを構築しています。当社は国のDX認定制度の認定事業者にも選ばれています。ただ、大事なのは『今自分たちが仕事を効率化するにはどのようなものが必要か』という観点です。デジタルツールは道具に過ぎないということです」

―今後の事業展開についてお聞かせください。

「半導体製造装置関連で言いますと、ウクライナ戦争の影響による供給不足から、欧州のお客さまからも自動化に関するニーズが出てきています。そのため、社内でも世界を見て仕事をしようと言っています。ただ、半導体関連だけに固執しようとは考えていません。経営の安定化を考え、半導体以外、例えば人工衛星や防衛関係、ソフトウェアといった分野にも力を入れていきたいと考えています。加えて、今後の市場拡大が見込まれるパワー半導体向けにも対応していきたいです」